

南方（比島）

原隊はレイテ島に消えた

愛知県 鷺野 貞夫

私は三重県桑名で生まれましたが、大阪の叔父に子供が無いので、そちらの養子となりました。

昭和十六（一九四一）年十月、兵隊検査を大阪の曾根崎で受けました。百二十人のうち三十人が甲種合格となり、私もその中の一人になりました。そして「昭和十七年二月十五日、広島に集合すべし」との令状が参りました。行先の部隊は満州公主嶺学校でした。

桑名から五十人が出発しましたが、名古屋から

の軍用列車には一千人位の兵隊が客車に乗っていました。

当時の出征風景は、太平洋戦争が始まった時点で、緒戦の大戦果に全国が酔っていた頃です。から、それはもう大変なもので、我々も祖国を護る決意を一層奮い立たせて挨拶をしたことを今でも想い起こします。途中は列車の窓は開放厳禁で防諜のこともあって厳重でした。広島に到着して太田旅館に宿泊しました。今想うと現在の原爆ドームの近くだったと思います。

そこで現地から出迎えに来てくれた下士官達の世話になり、早速、軍服に着替え、靴に足を合わせて軍靴にはきかえ、帯剣を下げ、軍帽に頭を合わせてかぶると、身も心も一応は帝国軍人の一員

となった気分になりました。

小銃は満州に着いたら渡すと云われました。今まで身につけていた私用品は故郷に送り返し、民間人から軍人に切り替えを終えました。身体検査も無事終わり一路満州を望むのみでありました。

数日後、宇品港まで堂々の軍隊行進に胸を張り「歩武堂々」とはこういう気分かなと歩を進めました。

輸送船に乗りいよいよ祖国ともお別れかと、一瞬感傷的になりました。輸送船内は窓から海を見れば、駆逐艦が先になり後になり護衛してくれる姿を見て有り難く思いました。「さらば祖国よ、栄えあれ」と歌をいつしか小声で口ずさんでいました。やがて朝鮮の釜山に上陸、早くもニンニクの臭いが鼻をつくようでした。

国民学校に一週間宿泊、その間、国防婦人会の接待を受けました。やがて客車列車に乗車、窓はメ切をきつく言い渡され、朝鮮半島を一路北上を続け、停車した所は奉天（瀋陽）でした。生まれ

て初めて見る満州の風景にびっくりしながら五時間の停車後、再び北上するにつれ寒気が次第に強くなり、新京（長春）を通過してもなおも北進、ようやく目的地公主嶺に着いたら雪が降っていました。

時は昭和十七年三月六日でした。公主嶺学校は鉄筋コンクリート造り二階建の兵舎がズラーと並び建って、棟の数は二十ぐらいいもあるという広大な敷地でビックリしました。

この学校は関東軍の各兵科の下士官を教育する所で、主に対ソ戦の研究を目的とするのだそうです。総勢二千六百人です。学校長は栗栖猛夫中将でした。

部隊の正式名称は、

公主嶺校歩兵教導連隊（満州第四六〇部隊）

連隊長 尾子 熊一郎大佐

私の所属は第十中隊で重機関銃隊でした。

公主嶺は北緯四五度にあり、冬期の温度は零下

三〇度にもなる非常に寒い所です。兵舎は各部屋毎にペーチカがあり、窓は二重窓になっていますので室内の生活は楽でしたが、冬季の室外は防寒具なしでは過ごせません。

初年兵として入隊した私の一番苦労したのは冬の夜間演習でした。午後五時頃から演習場に行き、作戦実施軍と対抗軍に分かれ、タコツポに入って演習開始の「青吊星弾」が上がり動き出すまでの間を、寒さに耐えて待っているのが寒くて寒くて辛かったです。ラッパの合図で集合するのですが、方向を誤るととんでもない所に行ってしまうので迷子にならぬよう気をつけました。夜中の二時頃中隊に帰り、凍りついた食事をペーチカで温めて食べましたが、それまで空腹に耐えねばなりませんでした。

とにかく明けても暮れても演習また演習でした。対戦車戦法、斬り込み戦法、黎明攻撃、夜襲攻撃、対トーチカ戦などで、秋になると教覧演

習、トーチカ造りです。その他に一般勤務の衛兵勤務、厩当番、週番勤務、弾薬庫衛兵、材料廠勤務等の他に銃剣術大会、射撃大会、その他に演芸大会等で息つくひまがないとはこういうものかとお忙しでした。

昭和十九年に入ると戦局が不利になり、南方特に比島方面が危なくなつて参りました。学校は南方作戦用兵団として非常に期待され、昭和十九年六月、「ヤ号演習」の名目で旅団編成を命ぜられました。

「星兵団」と称号がきまり、独立混成第六十八旅団となり、栗栖学校長が旅団長となりました。そして教導隊は歩兵第一二六連隊となり、砲兵科は旅団砲兵隊に、工兵科生徒は旅団工兵隊に、通信科生徒は通信隊に、衛生科は衛生隊にと、学校全体が旅団に生まれ変わりました。総勢四千六百人でした。

部隊の構成員が関東軍各部隊からの選抜された

優秀な下士官ばかりですから、普通の召集兵で構成される部隊とは段違いに精強な優秀部隊です。そのため敗色濃くなってきた南方戦線からは非常に待望されていたそうです。

私達兵隊の同年兵も編成されましたが、私は幸か不幸か残留を命ぜられ、兵舎の跡始末や将校家族の帰国準備の手伝いで、荷造り発送から帰国手配に大童でした。残留者百二十人は昭和十九年九月まで部隊跡の整理や家族の送り出し業務をやりました。

十月になると沖縄方面行きの部隊が編成され、我々残留者百二十人も編入され、貨車に乗せられ釜山まで南下しました。

新しい部隊は独立混成第五十九旅団で多賀哲四郎中将が旅団長でした。独立歩兵第三九三大隊、福永侑少佐の第二中隊長豊田敏助中尉に所属することになりました。旅団の秘匿名は碧（へき）部隊です。

釜山では山中に駐屯中、酷暑に見舞われ生水を

飲んだので下痢患者が多発しました。しばらくして下関に着き民家に宿泊しながら毎日舟で門司に行き、八千トンの輸送船に弾薬や物資を積み込みました。

間もなく月日は忘れましたが二十隻の大船団で出航、ジグザグ航行で沖縄本島に着きました。米空軍にやられた沈没船のマストが数本水面に突き出ているのを見て戦況の切迫感がしました。

その後、宮古島に行き、上陸用舟艇で近くの伊良部島に上陸しましたが、その荷揚げ作業が一苦勞でした。

伊良部国民学校に宿泊しましたが風邪患者が多発しました（旅団全部が上陸）。私らは南国民学校に泊まり、水を井戸から汲み、学校裏の山の木を切り、萱草を刈って幕舎を建て、食糧弾薬等を陣地に運び込み米軍の襲来に備えました。

海岸に陣地構築中、米軍機（グラマン）の攻撃で島民が負傷するようになりましたが、我々兵隊

には訓練のせいかな損害はありませんでした。

対船監視や銃座の構築が仕事でした。珊瑚礁の地面に穴を掘り、機関銃を据え、銃眼を明けるのにノミ、鉄棒、円ピを使い八人が交代で苦勞しました。ようやく見事に銃眼があき機関銃の掩蓋壕が完成した時は「万歳！」をして喜びあいました。

そのうち食糧が少なくなつたので畑作りや漁労班の魚取り、海水を煮詰めて塩造り、炭焼き小屋で木炭作り等自活に入りました。

時には大きな台風に襲われ、幕舎が吹き飛ばされ、馬小屋で寝たこともありました。そのうち食糧不足による栄養失調症が多発するようになり、昭和二十年五月、宮古島に移動しました。大川という所で幕舎生活でした。

昭和二十年八月十五日、終戦となり、武装解除にはショックで、なすすべを知らずとはこういうことなのかと思いました。そして米兵の使役に出ることが毎日の仕事になりましたが、私はちょうど

どマラリアにかかりテントに寝ていました。

十二月に米艦に乗せられて浦賀の高射砲隊の兵舎に到着しました。私は栄養失調症の診断で自宅に帰りました。十二月十七日夜八時頃自宅に着いたのですが、ボロボロの服装で家に着いたためなかなか戸を開けてくれずに困っていました。すると母が外で声がするということで戸を開けてビックリ、兄と間違えられたようでしたがようやく中に入ることができ、父母と妹二人で三時間余りお互いの話をして過ごし、足掛け四年ぶりに我が家で寝ることができました。

昭和二十年十二月から昭和二十一年一月は大雪が降りました。終戦時の階級は陸軍兵長でした。

公主嶺（星）兵団は、陸軍の華といわれた関東軍の精鋭を集めた教導隊、しかもその下士官を主体に編成された旅団で、四千六百人全員が自動小銃装備の海上機動旅団でした。当初サイパン防衛用として使用予定が間に合わず、比島防衛を目的

に編成中でしたが大本營の方針が急遽レイテ決戦に変更したため（台湾沖航空戦の大戦果の誤報による）米空軍制圧下のレイテに上陸することになったのです。しかしその上陸予定地点が接岸不可能のためレイテ北端の海岸に擱座させ上陸しました。ため兵員は上陸できたのですが肝心の重砲、兵器、弾薬、食糧などはすべて空襲に曝され使用不能になりました。

折角優秀な兵団も徒手空拳ではいかんとも仕難く、レイテ決戦の混戦の中に紛れて消えていったのです。

旅団長栗栖少将は第二十六師団長代理となり昭和二十年七月十七日戦死、後中将。後任旅団長・冲静夫少将は昭和二十年七月三日戦死、中将。連隊長金田長雄大佐は、昭和二十年七月十二日戦死、少将。昭和二十年六月の生存者は金田大佐以下十八人に過ぎず、以後全員戦死のため、実際の戦闘状況などは不明と云う悲惨な結末に終わったのであります。

レイテ作戦担当第三十五軍司令官鈴木宗作中將も戦死している。レイテに行った同年兵は一人も帰っておりません。

比島、バターン半島の戦い

京都府 西村 頼 夫

私の生家は米作と養蚕の農家で、父母と祖母に男三、女五の八人兄弟の十一人家族でした。私は、その長男として生まれ、学校卒業後、京都で牛乳販売店に二年間勤めたあと大阪へ行き、鉄工の職業訓練を半年間受け、大阪市内の町工場に勤めていました。

十九歳になった時に親のすすめで舞鶴の海軍工廠に就職しました。

昭和十四（一九三九）年の徴兵検査の結果、甲種合格になりました。徴兵官から「馬の扱いができるか」と聞かれ「できません」と答えました。